

《優秀賞》

恵みと災いの間にある大切な水

学校法人大阪医科薬科大学

高槻中学校

2年

嶽北 たけきた 沙良 さら

蛇口をひねれば当たり前のように出てくる透明な水。大阪市中心部のビルに囲まれた街で育った私にとって、水はいつもそばにあるのが当たり前で、その大切さを深く考えることはありませんでした。しかし、母から聞く私の幼い頃の記憶が、水についての考えを深めるきっかけをくれました。

私は幼稚園に入る前の数年間、家族とイタリアで暮らしていました。当時の記憶は断片的ですが、母がよく話してくれるエピソードがあります。それはイタリアの硬水についてです。現地の水は石灰分が多く、肌の弱かった私の体はすぐに荒れてしまい、母は毎日、体を洗う水や飲み水を用意するのにとても苦労したそうです。日本に帰国し、大阪の水道水を飲んだ時に「水が甘くて柔らかい」と感じた母の言葉を聞き世界中のどこでも同じ水が手に入るわけではないのだと幼心に知りました。学校で、私たちが利用できる淡水は地球全体のわずか0.01%に満たないと学んだ時、母の言葉を思い出し、水は決して無限ではない命の源なのだと実感しました。

一方で、水は災いとして私たちの前に立ちはだかる時があります。近年、この怖さを伝えるニュースが相次いでいます。例えば、2024年9月に石川県能登地方を襲った記録的な大雨では、線状降水帯による氾濫で多くの家が浸水し、断水によって数千世帯の水が使えない不自由を強いられました。また、2025年の夏には各地で深刻な渇水が起き、宮城県のダムで貯水率が0パーセントになるという衝撃的なニュースも目にしました。イタリアでも、ベネチアが高潮に見舞われる一方で、北部では雨が降らず、農作物が枯れるなど、水は恵みであると同時に、牙を剥けば日常を一瞬で奪い去る恐ろしい存在にもなります。

地球上の水は絶えず循環していますが、その資源には限りがあります。私たちが水を汚したり無駄遣いしたりすれば、そのツケは必ず自分に返

ってきます。

では、私たちはこれから水とどう関わっていくべきでしょうか。私はまず「想像すること」から始めたいです。自分が使った水がどこへ行くのか、その先にどのような自然があるのかを想像します。洗剤を使わずに、食べ残しを流さないなどといった小さな行動が、水循環を守ることに繋がります。また、ハザードマップを確認し、水の怖さを知って備えることも大切だと思います。

大阪の街もイタリアの風景も、すべては水があるからこそ存在しています。この恩恵を次の人へ渡すためにも、私は一滴の水を大切にすることを、自然への感謝を忘れずに生活していきたいです。